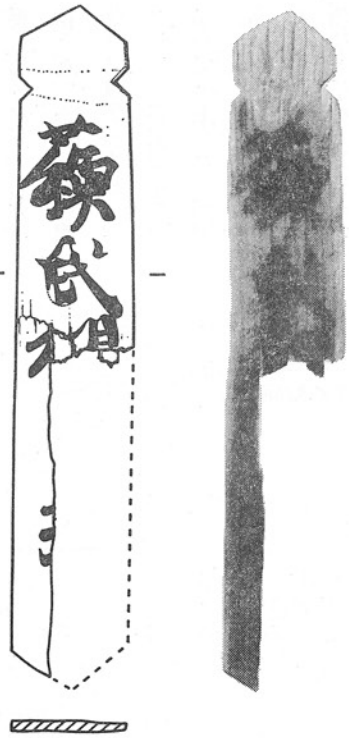


出している。右下半分は欠損する。また、上部の切込みの部分に紐状のものが巻かれていた痕跡がある。「蘇民」の二文字は判読でき、下部は欠損のために不明であるが、残された部分に墨書があり、三文字目は痕跡より「将」、また下部に残る若干の墨痕は「孫」の一部と考えられる。上部「蘇民」より下部の文字を推定すると、「将来子孫…」という言葉が考えられる。この蘇民将来札は、平安時代疫病神信仰の展開を考える上での貴重な資料となるであろう。

**9　関係文献**


岡本広義「壬生寺境内遺跡発掘調査の概要」（『元興寺文化財研究』三七　一九九一年）

岡本広義「壬生寺境内遺跡出土の蘇民将来札」（『元興寺文化財研究』三八　一九九一年）


（岡本広義）

## 京都・里（さと）遺跡

**1**　所在地　京都府綾部市里町

**2**　調査期間　一九九〇年（平2）一〇月～一九九一年二月

**3**　発掘機関　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター

**4**　調査担当者　田代　弘

**5**　遺跡の種類　集落跡

**6**　遺跡の年代　弥生時代中期、古墳時代～室町時代

**7**　遺跡及び木簡出土遺構の概要

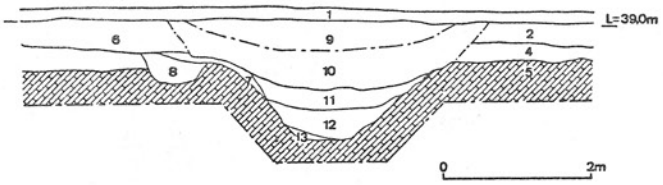
里遺跡は、綾部市街地の北方約一・五㎞、由良川の北岸の標高四〇m前後の低位段丘上に立地している。遺跡付近は旧丹波国何鹿郡吉美郷に属し、何鹿郡家が所在する綾部郷に北接する地域である。この地は福知山盆地の東端にあたり、南は須知（しゅうち）を経て丹波国府の存在が推定されている亀岡盆地に至り、北は日本海岸の舞鶴方面へ抜ける交通の要衝である。

（綾　部）

本調査は府道建設に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査は遺物の包含状況・遺構の有無を確かめるために試掘を行なった後、遺構密度の高い地点に四カ所の拡張区を設け、面的な調査を実施した。

調査の結果、遺跡の主要な範囲は、段丘中央の平坦面を中心として東西一〇〇m以上、南北一〇〇m前後と推定された。遺構には、弥生時代中期の溝状の落ち込み、古墳時代後期の古墳の周濠、奈良時代の掘立柱建物・井戸・土坑、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などがある。奈良時代（八世紀代）と平安時代末～鎌倉時代（一一～一三世紀代）が中心となるようである。

遺物は整理用コンテナに三〇箱ほど出土している。ほとんどが土器類で木製品は木簡一点のみである。土器類には、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・黒色土器などがあり、一二世紀代の土師器皿・瓦器椀が多い。須恵器は八～一〇世紀頃の杯身・蓋や椀、中世の須恵器甕の体部



木簡出土溝断面図

破片などである。輸入陶磁器（青磁椀・白磁椀・青白磁合子）も少量みられた。その他、滑石製の石鍋がある。

木簡は、段丘の縁辺部に掘られた東西方向の溝の底（一二層）に密着した状態で出土し、一〇世紀代の須恵器が伴出した。一一層は遺物をほとんど含まず、一〇層からは一二世紀代の土師器・瓦器・輸入陶磁器が出土している。この溝は集落の南端に位置しており、区画溝と考えられる。

8　木簡の釈文・内容

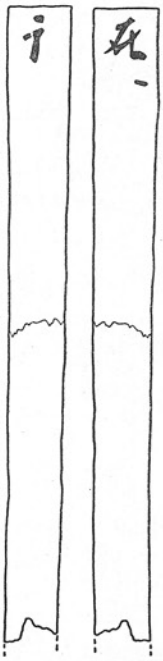
(1)　(420)×30×10　019

・「在□

・「□

木簡は長方形の板材が用いられているが、下端が欠損しており原形は明らかでない。墨書は両面に認められる。判読できるのは冒頭の「在」一文字だけであり、内容は不明である。

9　関係文献

田代　弘「綾部市里遺跡発掘調査概要」（㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』四一　一九九一年）

（田代　弘）